

## 源氏物語 禁忌侵犯の回避とその表現

——「あはれとだにのたまはせよ」をめぐる——

小 島 繁 一

一

「秋の末つかた」、薫は都から「いと忍びて、御ともに人などもなく、やつれて」宇治へやってきた。宇治の山荘から折しも姉妹たちの合奏が聞こえてくる。薫はごく自然に応待を求めた。

「かく、濡れくまゐりて、いたづらに帰らむうれへを、ひめ君の御方にきこえて、「あはれ」と、の給はせばなむ、なぐさむべき」  
(Ⅳ 312)<sup>①</sup>

「宿直人めくをのこ」を介して当然のように「あはれ」と、の給はせばなむ」と語るのは薫の側からは理由のあることだった。都からはるばるやってきたその苦業の代償として女の側からの情愛（「あはれ」）を求めようとしたからである。それは一方で宇治で迎える側にとっては苦業の代償を求められる役割を担わされているこ

ともである。宇治という地が都からやってくる者を迎えるという都との距離の重みを背負うかぎり、宇治までやってくる苦業の代償として相手からの情愛を求める言葉（「あはれ」と、の給はせばなむ」）は、宇治の時空を表象するものになるだろう。

薫は都から宇治へやってくるとき「やつし」姿をしているが、「やつし」が境界を越えるための呪性を帯びる状態であることを思えば、都から宇治へ向かうことは異なる空間への移行であることを意味する。宇治へ入ると同時に「あはれ」の情趣が薫をとりまいていくように描かれる（Ⅳ 310～312）。が、宇治の風景自体が「あはれ」を誘う面はあるとしても、風景が根本の原因ではない。境界を越えて別の空間へ移行するという行為によって、薫の内面に「あはれ」が漂ってくるのであり、とともに移行に要した苦業の代償として、相手の「あはれ」を要求する思いが湧きあがってくるのであろう。

薫の側からは宇治は都とは異なる空間であることを意味し、そこでは相手からの「あはれ」が要求され、「あはれ」を共有することの可能な空間が存在している。その点でこの言葉は宇治を舞台とする橋姫物語を特徴づける重要な役割をもっている。しかしそれだけではない。この言葉にはもう一つの意味の響きがあるように思われる。かつて柏木が類似の表現を使っていたことが想起されるのである。しかもそれはさらに淵源をたどれば薄雲巻での光源氏の言葉の中にも見い出せる。そこには何らかの連関があるのではないか。あるならそれはどのようなものであろうか。

源氏物語内において、ある人物や場面で一度使われた言葉や表現が後の物語の中で再び使われることがある。作者の意識的なものによる場合もあればそうでない場合もある。しかしその有無はあまり本質的ではない。作者の意識的であると否にかかわらず、その言葉や表現がそれ以前に使われたときの人物の内面や場面などを思い合わせて考えさせてしまう構造を作品はもっている。先行物語からの引用の場合なども含めて、このような表現技法は「物語取り」と呼ばれたりしているところのものである。ここでは「あはれ」と、<sup>③</sup>の給はせばなむ」あるいは「あはれ」とだに、のたまはせよ」という言葉を主にとりあげ、光源氏・柏木・薫が深い部分においてどのように連関しているかを考える手だてとしてみたい。<sup>④</sup>それぞれの

場面でその言葉がどのような機能をはたしていたのか、そしてそれがそれぞれどうお互いに響き合っているのかを探ってみたいのである。

## 一一

まず光源氏の薄雲巻の言葉からとりあげることにする。光源氏は冷泉帝に入内させた養女梅壺女御が二条院へ里下りしてきた折に語り合う機会をもつ。女御に懸想をしかけてくる光源氏の言葉の一節である。

「かやうなる、すぎがましき方は、しづめ難うのみ侍るを。おぼろげに思ひ忍びたる御後見とは、思し知らせ給はんや。『あはれ』とだに、の給はせずば、いかにかひなく侍らん」(II 241)

女御に懸想をほのめかすが、即座に自らの思いをおしとどめようとする自制が働く。その思いとどめた言葉の末尾に、未練を残すかのように「あはれ」とだに、の給はせずば」とくるのである。光源氏は懸想心を抱いても、かつてのようにそれを貫くというような行動をとろうとしない。「あはれ」の言葉を要求するだけになっていく。光源氏のそれまでの行動原理からすれば要求範囲が大幅に縮小せられているということができよう。光源氏が懸想をほのめかすのに対して女御は「むつかしうて、御答へもなければ」という様子である。それを光源氏はすぐさま察知して「こと事に言ひまぎらは

し給ひつ」という体である。懸想を抑止しつつ、それでも女御からの言葉は要求している。いや、というよりも懸想を断念するがゆえに、「あはれ」の言葉だけでもと要求するのである。光源氏はなおも未練がましく歌を詠む。

「君もさばあはれをかはせ人知れずわが身にしむる秋の夕風  
しのびがたき折／＼も侍りし」  
(Ⅱ 243)

女御の返歌はない。光源氏は思いをはたすこともできず、かえって自らを「わか／＼しう、怪しからず」と戒めている。これは何を意味するか。

光源氏のこうした現段階の状況を端的に示す述懐が、引き続いていく文脈で語られている。

「かう、あながちなる事に、胸ふたがる癖の、なほありけるよ」  
と、わが身ながら思し知らる。「これは、いと似げなき事なり。  
恐ろしう、罪深きかたは、多うまさりけめど、いにしへのすき  
は、思ひやり少なきほどのあやまちに、仏・神も、ゆるし給ひ  
けん」と、おぼしきまますも、「猶、この道は、うしろやすく、  
深きかたのまさりけるかな」と、思し知らせ給ふ。  
(Ⅱ 244)

自分の心に湧き起こってくる懸想を自ら見すえている。そこから過去の行動をふり返って藤壺との密事に思いをめぐらしている。「いにしへのすき」とは藤壺とのことを指している。藤壺とのことを

#### 源氏物語 禁忌侵犯の回避とその表現

「いにしへのすき」と過去へと押し込め、それについては「思ひやり少なきほどのあやまち」とし、「仏・神」も許してくれるだろうといわば勝手に判断している。それゆえ恋の道に対しても思慮深い行動をとれるようになったと自らで結論づけている。女御への懸想を抑止した自己を弁護する述懐の結論になっているが、ここに物語の新たな転換を読みとることができるよう思われるのである。

光源氏が梅壺女御を懸想しつつその枠内を越えないことについては物語上のいくつかの説明はほどこされている。冷泉帝にすでに入内していること、故六条御息所の遺児であることなど。光源氏はとうていこの場で、あるいはこの政治状勢の中で女御との禁忌を犯すことなどありえないだろう。たしかに瀟灑巻以降の物語内の状況では女御との禁忌を犯す物語は構想されていなかったとしても、懸想心が動きながらはたせない光源氏に我々は何の異和感も抱かずに読み進めることはできない。

ここには明らかに藤壺物語を相対化しようとする第一歩が企図されている。どういう内実の相対化か。結論的に述べるなら、おそらく藤壺との密通という禁忌侵犯によって進められてきた物語秩序の相対化であると考えられる。禁忌侵犯によらない物語秩序の道筋がここで確認されようとしているのではないだろうか。

光源氏と藤壺との物語はすでに多くの論者が述べておられるよう<sup>⑤</sup>

に、神話的な論理に支えられている。その密通は「王権」にかかわる禁忌侵犯であり、その行為は反秩序的な非日常性をもっており、そのことよって光源氏は聖性を獲得していたといえるのであろう。しかしそれだけではない。益田勝実氏が、桐壺帝が天皇を圍繞している禁忌を破って更衣への愛を貫いていくところに人間的な姿をみておられたように、光源氏の藤壺への禁忌侵犯も同じく人間性の回復行為であったといえる。いわば、光源氏と藤壺との物語は、禁忌侵犯の行為が非日常的でありそのことで光源氏の聖性を保つという神話的な論理と、その行為が人間性の回復や愛の姿でもあるという物語的な論理との幸福な一致をみたものである。あるいはそういう段階にある物語であるともいえる。二人の間には「魂の共感」<sup>⑤</sup>を認めることもできる。禁忌侵犯がすこしずつ闇の部分を探めていく根源になっていくにせよ、この二人の物語世界は源氏物語においてもあとにも先にもない僥倖であったというほかない。二人の物語はむしろ肯定的に描かれてきたし、物語推進の原動力でさえあった。ところがそれをここでは光源氏自身の述懐として「いにしへのすきは、思ひやり少なきほどのあやまちに」と否定的に過去のものとして押しやっているのだ。物語の転換がここに読みとれる。「分別のある自制の利いたものに変わってゆく。以後、源氏の行動がこの文の趣旨に大きくそむくことはない。」(小学館古典文学全集頭注)とある通り

だろう。では「この文の趣旨」とは本質的には何であるか。藤壺物語の相対化をこの文脈で読むとするならば、今後の物語展開において、禁忌侵犯が人物の行動原理から排除されていく、ということの意味しているのではないだろうか。禁忌侵犯を物語の人物に課さない方向への道である。そして、光源氏の行動原理から禁忌侵犯の論理を排除したときに出てきた言葉が実は「あはれ」とだに、の給はずば」なのである。これは偶然のことなどではない。禁忌侵犯の排除とこの言葉とは密接に結びついているのである。それはなぜか。ある一つの状況を別の面から言い換えているだけのようなのだ。その点を説明しなければならぬ。

竹取物語から類似した問題をひきだしてみたい。かぐや姫は昇天する間際の場面で、帝に歌を贈った。

今はとて天の羽衣(ま)きるおりぞ君をあはれと思ひいでける

地上にやってきたかぐや姫にとって禁忌というものがあるとすれば、それは地上の人々と深い契りを結ぶことであつたらう。かぐや姫は、自ら与えた難題によって五人の貴公子からの求婚も破綻させることができたし、帝からの求めにも拒絶の姿勢を崩さなかった。禁忌は守られたのである。最後の場面で、かぐや姫は天の羽衣を今まさに着ようとする直前、つまり帝と契るといような禁忌侵犯に陥ることがないと確実になったときにはじめて、帝への「あはれ」の感情

を詠んだのである。言葉としてはっきりと表出したのである。と考  
えるなら、相手を恋慕いづつも禁忌侵犯という行為にまでは突き  
進まない、男と女の間に関わることが許される最上の言葉が「あは  
れ」であるといえるであろう。帝の前に、五人の求婚者の最後の石  
上中納言に対して「かぐや姫すこしあはれと思しけり。」とあつた。

「すこしあはれ」であつて帝への歌とはずいぶん異なることが意識  
的に述べられているが、しかしこれも同じく、中納言が求婚者とし  
ての役割を終えたことが確定してから、すなわち禁忌が破られない  
ことが前提となつてはじめてかぐや姫の「あはれ」の心の動きが表  
出されるのだった。禁忌侵犯という行為の存在する時空から切り離  
された人間達の恋愛においてその位置を占めるのが「あはれ」の言  
葉であつた。

かぐや姫が帝と契りを結ばなかつたところから「あはれ」がでて  
きたように、光源氏が女君に「あはれ」を希求する姿に、禁忌侵犯  
を伴中人物に強いることのない、物語の新たな段階への歩みを読み  
とることができらるだろう。そのことはすなわち、物語にとつては神  
話的な論理から脱けてくることであり、同時にそれは人間的な課  
題の追究という道筋であることを意味するものでもあるだろう。

## 二

### 源氏物語 禁忌侵犯の回避とその表現

柏木の言葉においてはどのような特質をもっているであらうか。若  
菜下巻、柏木が女三宮の寝所へ忍び込み、自己の思いを訴えている  
密通の場面にその言葉はあつた。

「めづらかに、情なき御心はへならば、いと心憂くて、なか  
く、ひたぶるなる心もこそ、つき侍れ。『あはれ』とだに、  
のたまはせば、それをうけたまはりて、まかでなん」(Ⅲ 373)  
ようやく実現した女三宮との密会であつた。ひたすら柏木は宮へ思  
いを訴えるがその返答すらもない。それゆえ、せめて「あはれ」と  
いう言葉だけでもと懇願する。時が過ぎ「あけぐれ」近くになって  
柏木はなお訴える。

「すこし思ひのどめよ」とおぼされば、「あはれ」とだに、の  
たまはせよ」(Ⅲ 375)

柏木巻に至つても、病の床でなおかつ、「いまはとて燃えん煙も  
むすぼゝれたえぬ思ひのなほや残らん」と歌を詠み、続けて語る。

「あはれ」とだに、の給はせよ。心のどめて、人やりならぬ聞  
にまよはむ道の光にも、し侍らむ」(Ⅳ 13)

「あはれ」の言葉をかけてくれたら、死後の光明にもしよう、とま  
でいう。全く判で押したかのような同じ言葉が三度くり返された。  
やや広義に類似の表現をあげれば、「『あはれ』とやおぼし知る」  
(Ⅲ 371)「なげのあはれをまかけ給はむ人のあらむにこそは、一つ思

ひに燃えぬるしにはせめ」(IV 12)「とがめ聞えさせ給はむ人目をも、いまは、心やすく思しなりて、かひなきあはれをだに、絶えずかけさせ給へ」(IV 17) などがある。女三宮の返答がないので柏木は情愛の言葉だけでもかけてほしいというのである。

禁忌侵犯を作中人物から回避させようとする方向への物語の表れがこの言葉であると述べたが、柏木と女三宮との密通や柏木の訴える言葉はどう理解すべきであるか。まずすくなくとも光源氏と藤壺の物語のごとき「王権」にかかわる禁忌侵犯でない点において全く位相を異にしているといわなければならない。しかも光源氏と藤壺との禁忌侵犯にあつては神話的な論理と物語的な論理とが一致をみていたことに注意を向けおくべきであろう。

ここで男と女における禁忌とは何かということについて考えておく必要がある。例えば次のような栗本慎一郎氏の見解は充分認められるであろう。「男と女の性愛は、生物学的に生殖という結果をもたらすとしても、もともと聖なる他界との接触をもとめる宗教的行為なのである。」と。ここでいう「他界」とは「神話的宇宙」であると定義し、「聖なる他界は死によってだけではなく、激しい禁止の侵犯によつてもうかがうことができる。」としている<sup>⑩</sup>。禁忌というものが本来的に「他界」を孕むというのは示唆的な意見である。それゆえ禁忌侵犯とは「他界」を垣間見ることにほかならないので

ある。その意味ではまさしく光源氏と藤壺との禁忌侵犯の物語は「他界」を孕みつづけていたといえよう。「王権」にかかわるその禁忌性が強ければそれだけ、物語の孕む「他界」はより力を秘めたものになるといえる。その「他界」はもちろん非日常性を帯びている。禁忌侵犯が物語内で重要な意味を帯びさせられて描かれている。禁忌侵犯が孕むその非日常性は日常性と充分向き合う力をもっているということでもある。藤壺が光源氏に贈った「唐人の袖ふることは遠けれど起ちぬにつけてあはれとは見き」(I 273)の歌は、禁忌侵犯の内に「あはれ」が過不足なくありえた、きわめて希な事柄に属する。ところが柏木は女三宮と密通に及びながら、宮の方はそれを拒みつづけるために、「あはれ」とだに、の給はせよ」が発せられる。禁忌侵犯の本来が、「他界」あるいは非日常時空をその瞬間現出させ、そこで男と女の交情が行われるものであれば、このような柏木の言葉は発せられることなどありえないといふべきではないか。この言葉や要求は禁忌侵犯の論理と相入れない。柏木が類似の表現を非常に数多くくり返すことの意味は、かえって柏木の犯した密通が原初的な意味を担った禁忌侵犯でありえていないことをきわだたせていることになるのではないか。そこでは混沌としたイメージの「あけぐれ」にあつても非日常の時空は現出せず、男と女の交情の時空の機能がはたされていないのであつた。非日常的

時空の排除という点では薄雲巻で言葉を発した光源氏とこの柏木とは同じ位相に在るといえよう。その後、光源氏もまた女三宮との交情が成立せず、宮に「猶、「あはれ」とおぼせ」(IV 38)と語るところまで下降している。

ところで、恋しい相手から、「あはれ」と思われたいというのは古今集の中にもみられる。602番「月かげにわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとやみん」や857番の哀傷歌に「かずかずに我をわすれぬものならば山のかすみをあはれとはみよ」に顯著である。とりわけ問題であるのは502番の歌である。

あはれてふことだになくはなにかは恋のみだれのつかねをにせん

古注から契沖までは多くこの「あはれてふこと」を恋しい相手から「あはれ」をかけてくれることと解釈している。『余材抄』には、次のように述べられている。

人のあはれとたにもいはずは何をか乱れたる恋ををさむるつかね緒にせんとなり物を取集てゆふ緒によせたり又一説にあはれてふはみつからいふあはれなり下の長歌に墨染の夕になれはひとりあてあはれくとなけきあまりとよめるあはれなり思ひあまる時のことくさなりされともことくさのみにてはつかねをにはなりかたかるへし<sup>⑭</sup>

#### 源氏物語 禁忌侵犯の回避とその表現

これに対し真淵の『打聴』では、

あはれと人のいひ侍るにより恋のつかね字と成たりといはどはやく逢て物思ひもなきなりさる部立にはあらぬをもておもへ<sup>⑮</sup>

と批判している。現在の注釈書はほとんどこれを採用している。しかしながら契沖までの解釈についてもむげに退けることもできないのではないだろうか。この歌の状況を真淵のように考えずに、例えば、かなえられることがきわめて困難な相手への恋慕であって、せめて「あはれ」という言葉だけでもかけてくれたなら、自分の恋による心の乱れをおさめる緒にできる、という思いがこめられているとすることはできないだろうか。この歌はちょうど柏木の言葉や状況と重ね合わせて詠むことができるのではないか。古注などでもこの歌を柏木の状況と重ねて理解したのかもしれない。それは措いても、このように相手がかかる「あはれ」の言葉を自らの乱れのなぐさめにする、というような解釈もありうるだろう。

柏木に戻っていえば、恋の成就が不可能であると意識されればされるほど、せめて言葉だけでもと、なお交情を願いつづけるのは当然であろう。柏木はより極限にまで陥っている。薄雲巻の光源氏の言葉は神話的な論理からの離脱という段階としての意味をもち、柏木は地上的な論理の中に生きる男と女の交情の困難さという特質をもつといえるだろう。この言葉は男が下位の立場から上位にいる女

に「あはれ」を求めるという性格をもつ。つまり恋の關係において、女が男に対して対等、あるいはそれ以上に自己の存在の重みを示しはじめていることの表れでもある。または、男の側の論理が優位に立つことを許容しない物語状況の表れともいいえよう。このような道筋をたどりながら、禁忌侵犯を描かない物語は非日常の時空をななくした地上に生きる男と女の交情の困難性を深めていったようである。<sup>④</sup>

## 四

都から宇治へやってくるその苦業の代償に薫は相手からの「あはれ」を求めた。都との距離が意識されつづける橘姫物語を特徴づける言葉であった。そしてその一方で前述してきたように薄雲巻で光源氏が発した、そのときの状況がこの宇治の物語にまで通底しているのであった。物語は、禁忌侵犯を排除し、地上に生きる男と女の交情が困難なものであるという作者の現実認識によりつつも、しかしなおそのでぎうるかぎりの交情の可能性を求めようとしていた。したがって、薫の「あはれ」と、給はせはなむ」という言葉は、交情の困難性という認識と、それであってもなおかつ可能なかぎりの交情を求めつづける物語の方向性とを同時に示すものであったといふことができよう。

薫は容易には恋に「まどは」ない、仏道心をもった人物として慎重に大君とのかかわりが描かれていた。総角巻で、匂宮と図って姫君たちの寝所へ入ったその折の場面で薫は恋の「まどひ」を詠んだ。例の、明(け)行くけはひに、鐘の声など聞ゆ。「いぎたなくて、出で給ふべき気色もなきよ」と、心やましく、こわづくり給ふも、げに、あやしきわざなり。

## 道

「しるべせし我やかへりて惑ふべき心もゆかぬ明け暮れのかゝるためし、世にありけんや」と、の給へば、心からに、憂くぞ聞き給ふ。

かた／＼にくらす心を思ひやれ人やりならぬ道に惑はゞと、ほのかにのたまふを、いと、飽かぬ心地すれば、(IV 417)

最晩年の光源氏において、男の恋への「まどひ」が仏道からすれば愛執であるのとらえられた。薫は、かつて女と交情へ入り込む契機たりえた「まどひ」が仏教思想を抱え込むことよって抑止させられている。それゆえ仏道修業に心を向ける薫には恋の「まどひ」に陥らないような配慮が作者にあったと思われる。「まどは」ない、薫像の提示であった。しかし男と女の交情を求めようとするとき、独創的な人物であった薫もやはり「まどふ」ことが必要になる。そのきたるべき交情の場面まで作者は慎重に薫の「まどひ」を避けよ

うとしてきたように思われる。そのきたるべき交情の場面がこの箇所であった。薫はついに「まどひ」を大君に訴えた。しかも混沌とした非日常的な「あけぐれ」の時空においてである。仏道心をもつ薫にとって大君と契ることは禁忌侵犯になるのだろうか。仏道心をもつ薫の日常性の中では女と契るという行為は禁忌性をもちうるかもしれない。そうであればこの「あけぐれ」の非日常の時空は日常性と鋭く対立し緊張し、その時空の効力も強くなるだろう。しかしその時空に交情の可能性をみることを物語は断念していた。若菜下巻で柏木が非日常性を求めようとしたのに対して女三宮が拒否したことなどを想起しなければならない。禁忌侵犯に近づきながら、その無効性を確認する物語が語られつづけるのである。ここでも「まどひ」を訴える薫に対して大君の「人やりならぬ道に惑はゞ」という返歌は、薫の「まどひ」を自分勝手な「まどひ」でしかないと否定し拒否している。「あけぐれ」も詠み込んでいるが、女に受け入れられない。交情可能な時空としてありえたはずの「夜」や「あけぐれ」の非日常の時空の効力は全く失われてしまっている。幾度も薫と大君は「夜」を徹して対座した。橋姫物語において「夜」の時空の無効性は著しい。あるいは交情の時空への契機であった男の恋の「まどひ」も無力である。宇治という時空は「あはれ」を共有することの可能な地であったが、それは薫の住む都からみた視座であ

り、宇治を日常の時空とする大君にとって薫の側からの論理は拒否せざるをえないものであった。この薫の歌に注目すれば明らかだが、「しるべせし我やかへりて」と自分の恋の「まどひ」を、いわば他人を導いたそのせいでこのようになってしまったというのである。相手への全霊的な恋の「まどひ」による訴えになりえていない。このようにみていけばわかるように橋姫物語においては交情可能な非日常の時空が創り出される要件はどこにもみあたらない。いや、非日常の時空は橋姫物語の展開の中で、物語の世界から結果的に否定せられ拒否せられている。

すくなくとも桐壺巻から総角巻が終る時点まで源氏物語は、男と女を向き合わせ交情の時空を設定しながらも交情をはたさずに終わらせまた設定する、ということをくり返しつつづけてきた。それはなぜであろうか。

幻巻で明石上と対面した光源氏が語り出した言葉の中に次のような一節があった。

「人を、「あはれ」と、心とゞめんは、「いと、わろかるべき事」と、いにしへより思ほえて、  
(IV 204)

仏道の面からみれば「わろかるべき事」なのではあるが、自然にさまざまな女性に「あはれ」の思いを抱いて心を向けてしまうという古今集939「あはれてふことこそうたて世中を思ひはなれぬほだしな

りけれ」と同じ内容のものだろう。「ほだし」にはちがいないが、しかし源氏物語においては強く否定されているものでもない点に目を向けることが必要である。「人を、「あはれ」と、心とよめん」とは、端的にいうなら他者との関係を希求することにほかならない、自然な心の動きであろう。人間の存在が孕みつづける他者へのたえざる魂の呼びかけあいのようなものではなからうか。ここでは、実はこの心の動きがつまるところ、「あはれ」とだに、の給はせよ」と近縁性をもっている点を、禁忌との距離のあり方において指摘したいのである。禁忌が破られないという状況の中でも、人々の内部に湧き起こるのが相手から「あはれ」をかけてほしいという要求であるし、また禁忌を破るところまでいかなくても、自己の内部に相手への「あはれ」という思いは湧き起こるだろう。つまり、禁忌侵犯にまで発展する激情を排したところの、他者との関係への希求、ということが共通項として認められるのである。

恋への激しい心の惑乱を意味する男の「まどひ」も、仏教思想を抱え込んだために抑止されている。物語は男と女を向き合わせ恋物語を進めようとするが、非日常的時空を生み出す契機を失ってしまった。女は宿世観に深くとらえられているし、男は「まどひ」を失っている。こうした状況の中ではたしてどのようにして交情が可能であろうか。交情の時空が設定され、その時空に入っていくた

めには正しい儀礼が要求された。それは男と女というものが本来それぞれ異界に属するという認識があるからであり、その両者は非日常的時空ではじめて交情を可能にしていた。ところがその時空を現出させる契機が、物語の内部からなくなっていくたのである。「人を、「あはれ」と、心とよめん」の思いが存在しているかぎり、男と女を向き合わせるような設定の物語はつづくだろう。しかしその思いだけでは交情の時空を現出させる契機にはならない。橋姫物語はそのような男と女を向き合わせ、交情の可能性を問おうとしたのであった。「あはれ」と、の給はせばなむ」から始まった橋姫物語は、薫の「おなじ心にもてあそび」(Ⅳ 392)「あながちなる心の程も、あはれ」と思し知らぬこそ、かひなけれ」(Ⅳ 393)、大君の述懐だが、「中納言の、とざまかうざまに、言ひありき給ふも、『人の心を見ん』となりけり」(Ⅳ 440)など、一貫したところをもって、明らからかであったように、その問いかけも結局はむなしのものであることを物語は確認していったようである。

大君物語と比べれば明白だが、浮舟物語は交情の時空の可能性など問題にしていない。浮舟の女としての生き難さが確認せられ、ただ一条、死への道を歩まされるのであって、薫も匂宮も救済者ではありえない。匂宮は「世に知らず惑ふべきかな先に立つ涙も道をか

きくらしつゝ」(V 226)「嶺の雪みぎはの水踏み分けて君にぞまどふ道はまどはず」(V 239)と「まどひ」を訴える。「まどひ」が本来もっていた日常性と鋭く対立し、その極限で非日常性が現出する、といった重いものになっていないのが匂宮の姿である。きわめて浮薄なものにとどまっている。浮舟はほんのひととき心寄せるが、それを「怪しからぬ」と自省しているところにも、匂宮の「まどひ」が相対化されていたことがわかる。男と女を向き合わせ、交情の可能性を問いかけたが、物語における非日常的時空は橋姫物語を語ることで終焉を迎えていたのである。禁忌侵犯の回避ともいうべき物語状況が同時に、「あはれ」とだに、の給はせよ」という要求も成就されない事態を生み出し、そしてついには、それを真に求める人物を描くことさえも物語は放棄することになっていったのである。

- ① 本文は岩波日本古典文学大系本による。( )内は巻数と頁数を表す。その他の作品引用の場合も、特に注記しないかぎり、大系本本文による。
- ② 乗岡憲正氏「やつし考」『古代伝承文学の研究』所収。
- ③ 池田和臣氏の一連の論考。「竹河巻と橋姫物語試論」(『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』所収)「物語取り」(『源氏物語必携Ⅱ』所収)。高橋亨氏「源氏物語の内なる物語史」(『源氏物語の対位法』所収、など)。
- ④ 柏木と薫の間に位置する藏人少将の言葉の中に「あはれ」と思ふ」とばかりだに、一言、の給はせよ、それにかけて止められて、暫しも、長らへやせん」(IV 275)とある。この藏人少将は戯画化されており、薫の

源氏物語 禁忌侵犯の回避とその表現

沈着として「まどは」ない姿と対照的に浮薄さが出ている。また、この言葉が非常に散文的であることが特徴である。一応今回の考察からは省く。

- ⑤ 例えは深沢三千男氏「光源氏像の形成 序説」(『源氏物語の形成』所収、廣川勝美氏「光源氏物語・反神話論的始発―禁忌背反の系譜―」(廣川勝美編著『神話・禁忌・漂泊』所収)など。
- ⑥ 注⑤と同じ。
- ⑦ 「日知りの裔の物語」『火山列島の思想』所収。
- ⑧ 鈴木日出男氏「八語り」のなかの「八歌」(『日本文学』81・5)。ただし、鈴木氏がその「魂の共感」を柏木と女三宮においてもみておられるが、本稿では光源氏と藤壺との関係においてのみありえたものと考えたいのである。
- ⑨ 藤井貞和氏「物語の神話構造」『深層の古代』所収)は、「天女といえども、人間界になじめば、天上界に帰るを得なくなる、という危険はあるのではないか。」と示唆されている。
- ⑩ 栗本慎一郎氏「同性愛の経済人類学」『幻想としての経済』所収。
- ⑪ 『頭昭』、『頭註密勘』など、相手からの「あはれ」の言葉であるとしている。
- ⑫ 古今集古注釈大成本によった。
- ⑬ 賀茂真淵全集第一によった。
- ⑭ 今回とりあげられなかったが、夕霧も同じような言葉を発している。「同じ野の露にやつるゝ藤袴 あはれはかけよかごとばかりも」(III 103)、「あはれとだに、おぼしおけよ」(III 104)とあり、玉鬘への思いを述べている。夕霧もまた交情の困難性を抱える地上的な人物である。